

2026 年 1 月 9 日

東京経済大学コミュニケーション学部メディア社会学科 3 年

佐藤 式

生成 AI 活用における大学教育の現状と課題
学習成果・利用行動・ガイドライン比較を通じた検討

目次

第1章	はじめに.....	3
第2章	日本と海外大学のガイドライン比較.....	5
2-1.	日本の大学：東京経済大学における生成 AI 利用の方針	5
2-2.	海外の大学：オックスフォード大学の厳格な利用基準	5
2-3.	日本と海外の違いの整理	6
2-4.	まとめ：比較から見える課題.....	6
第3章	先行研究レビュー	7
3-1.	生成 AI の利点に関する研究	7
3-2.	生成 AI のリスクに関する研究.....	7
3-3.	利用方法の違いが学習成果を左右することを示す研究	8
3-4.	課題設計（プロンプト設計）に関する研究.....	8
3-5.	小括..... エラー！ブックマークが定義されていません。	
第4章	分析・考察	10
4-1.	日本と海外大学の制度的違いが生む利用行動の差.....	10
4-2.	なぜ AI 利用は「学習成果の二極化」を引き起こすのか	10
4-3.	課題設計が AI 利用の質を決定する	11
4-4.	日本の大学が抱える構造的課題.....	11
4-5.	分析のまとめ	12
第5章	結論・提言	13
補論 エラー！ブックマークが定義されていません。	
	生成 AI をめぐる危機認識と大学教育の時間軸 エラー！ブックマークが定義されてい ません。	
付記 エラー！ブックマークが定義されていません。	
	生成 AI 開発をめぐるデータ制約と今後の転換点 エラー！ブックマークが定義されて いません。	
引用文献	15

第1章 はじめに

生成 AI の急速な普及は、大学教育にこれまでにない変化をもたらしている。特に ChatGPT に代表される大規模言語モデルは、文章生成、要約、文法校正、アイデア提示といった言語活動に強みを持ち、大学生がレポート課題に取り組む際のプロセスに大きく影響を与えている。2023 年以降、国内外で大学生による生成 AI 利用は急拡大し、全国調査では学生の約 30%がレポート作成等に ChatGPT を利用したと報告されている(仙台大学調査)。一方、同調査では学生の 27.8%が AI 出力をコピー＆ペーストして提出した経験があること、64%がファクトチェック方法を知らないことも示されており、生成 AI の利便性とリスクが同時に顕在化している。(斎藤ほか、2025 pp. 24-25)

こうした状況を踏まえ、文部科学省は 2024 年に「生成 AI の教育的利用に関するガイドライン」を公表し、生成 AI を“主体的な学びを補助するツール”として位置づけつつ、丸写しや不適切利用は学習の形骸化や剽窃にあたるとして明確に禁止している。また、AI 出力の根拠確認、批判的読解、情報の信頼性評価を学習者に求め、学校段階を超えて大学教育にも応用可能な理念を提示している。しかし、大学レベルではガイドラインの整備がまだ十分とは言えず、各大学で対応が分かれているのが現状である。

日本代表として本研究が取り上げる東京経済大学のガイドラインは、AI を「補助的活用」として位置づけ、学生・教員・職員それぞれに利用上の注意を示す一方、使用の申告義務や具体的評価方法の規程は設けていない。他方、海外代表のオックスフォード大学では、AI の利用は「許可された場合に限り認める」という原則が明確に示され、課題提出時には使用状況の申告が義務づけられている。さらに、AI 出力をそのまま提出することは学術的不正とみなされ、透明性・批判的思考・証拠に基づく議論を教育理念の中心に据えている。この差異は、日本と海外の大学の制度文化や学習観の違いを反映していると考えられる。

一方、実証研究に目を向けると、生成 AI の教育的可能性と限界がより具体的に見えてくる。例えば、統計教育における t 検定学習¹では、ChatGPT の利用が従来授業の 6 倍、独学の 12 倍の効率向上を示し、理解度にも強い効果が見られた(池田, 2025 p. 110)。英語学習アプリの研究でも、文章添削や学習課題生成など AI が提供する個別最適化が高い有用性認知を得ている。一方で、プロンプト設計が適切でない場合、生成されるレポートの質

¹ 二つの平均値の差が、偶然のブレか本物の差かを判断する統計的検定

に大きなばらつきが生じることも指摘されており（鎌田, 2025）、AI の教育効果は「利用の仕方」と「課題設計」に大きく依存する点が明らかになっている。さらに、RIHE²の総説では、生成 AI は大学教育の前提である「知識の記憶と再生型評価」を根本から揺るがし、「学習プロセス・思考過程の可視化」を求める新たな評価体系への転換を迫っていると指摘される。

以上を踏まえ、本研究の目的は、大学生による ChatGPT 利用の実態を整理し、生成 AI が学習成果に与える影響を国内外の研究から検討したうえで、日本と海外の大学ガイドラインの比較を通して、今後大学が採用すべき課題設計・評価方法・利用ルールを提案することである。研究質問は以下の三点である。

- (1) 大学生はレポート課題で生成 AI をどのように利用しているのか。
- (2) 生成 AI の利用は学習成果にどのような肯定的・否定的影響をもたらすか。
- (3) 不正利用を防ぎつつ教育的効果を最大化するために、大学はどのような課題設計・ガイドラインを整備すべきか。

これらの問いを通して、生成 AI 時代の大学教育の新しい枠組みを構築することを目指す。

² RIHE（Research Institute for Higher Education）は、広島大学に設置された高等教育研究機関で、大学教育や教育制度に関する研究を専門的に行っている。

第2章 日本と海外大学のガイドライン比較

2-1. 日本の大学：東京経済大学における生成 AI 利用の方針

日本の大学では、生成 AI をどのように教育に取り入れるかが大学ごとに異なっている。本研究で取り上げる東京経済大学は、生成 AI を「学習の補助ツール」として一定程度認める立場を示している。大学の公表したガイドラインでは、文章の構成案作成やアイデア出しなど、学生自身の学びをサポートする範囲での利用を肯定している。一方で、AI が作成した文章をそのまま提出することは剽窃にあたり不正行為とされ、学生に対して「AI の情報をそのまま信用せず確認する」「誤情報や偏った内容に注意する」といった、基本的なリテラシーの確保が求められている。[東京経済大学 情報システム課, 2023]

このように東京経済大学の方針は、AI を禁止するのではなく、適切に利用するための最低限の注意事項を示す形になっている。ただし、「提出時に AI を使ったことを申告する義務」や「どこまで AI を使ってよいかの細かな基準」は設けられておらず、実際の運用は教員の判断に任されている部分が多い。そのため、学生の間でも「どこまで AI を使っていいのか」が人によって解釈が違い、授業ごとにルールが異なるという課題が生じやすい。この点は、文部科学省が示す「AI 利用には透明性と根拠の確認が必要」という原則が十分に制度化されていないと言える。

2-2. 海外の大学：オックスフォード大学の厳格な利用基準

これに対して、海外の大学、特にオックスフォード大学では、生成 AI 利用に明確なルールを課している。同大学では、AI の利用は「教員が許可した場合に限り使用できる」という原則が示されており、AI を使う際はどの作業で使ったかを学生が提出時に説明する義務がある。さらに、AI が作成した文章を根拠なしにそのまま利用することは不正行為として扱われ、学術的な誠実さ（Academic Integrity）が損なわれる行為として厳格に禁止されている。[University of Oxford, 2025]

オックスフォード大学のガイドラインの特徴として、「人間の思考・判断を中心に置く姿勢」が一貫している点が挙げられる。大学は、AI は便利だが誤情報も多く含むため、「学生自身が情報の正確性を検証し、自分で論理を組み立てる力」を保持することが重要だと強調している。また、課題提出では「AI に依存した文章」と「学生自身が考えた文章」を明確に区別しなければならない、必要に応じてプロンプト（AI に与えた指示）や生成過程の提示を求められる。こうした透明性の重視は、学生の学習過程を可視化し、教育的な不正を防ぐとともに、批判的思考力の育成にもつながっている。

2-3. 日本と海外の違いの整理

東京経済大学とオックスフォード大学のガイドラインを比較すると、両者の間には大きな違いがある。日本の大学では「AI は便利な補助ツールだが注意して使おう」という姿勢が中心であり、学生の自主的判断に委ねられている部分が多い。一方でオックスフォード大学では、「AI の利用には申告が必須」「許可されていない利用は禁止」「AI の文章そのままの使用は不正」という、より厳格で制度化された方針が採られている。この違いの背景には、教育文化と大学制度の差があると考えられる。日本の大学では、学習者に自由度を残しつつ基本的な注意点を提示する“緩やかなガイドライン”が多く、制度設計は大学・教員ごとに分散している。一方で欧米の大学では、学術的な誠実さや透明性が重視され、AI の利用方法を明確に規定することで、公平性と教育の質を担保しようとする傾向が強い。また、海外大学では「AI が普及しても、人間が自分で考える力を中心に置くべきだ」という価値観が政策的にも浸透しているのに対し、日本の大学では「便利なら使ってもいい」という実務的な判断が優先されるケースが多い。この文化的差異は、課題設計や評価方法にも影響し、大学ごとに AI 利用の扱いにばらつきが生じる一因となっている。

2-4. まとめ：比較から見える課題

以上の比較から、日本の大学が今後取り組むべき課題として以下の点が浮かび上がる。

第一に、AI 利用の透明性を高めるため、提出時の申告制度や、許可される利用範囲の明確化が必要である。

第二に、AI が生成した文章をそのまま用いることを防ぐため、学生に対する情報の信頼性や根拠確認の指導を制度的に強化する必要がある。

第三に、教員側の AI リテラシーの向上も不可欠であり、大学全体で統一した方針や研修の整備が求められる。

こうした課題を踏まえ、次章では、生成 AI の教育利用に関する国内外の先行研究を整理し、利用の仕方と課題設計が学習成果にどのような影響を与えるかを詳しく検討する。

第3章 先行研究レビュー

本章では、生成 AI を大学教育で利用する際に重要となる三つの観点、すなわち (1) 利点、(2) リスク、(3) 利用の仕方と課題設計の影響を中心に、国内外の先行研究を整理する。また、学習者の意識や教育制度に関わる研究を総合することで、生成 AI が大学教育にもたらす変化を多面的に捉える。

3-1. 生成 AI の利点に関する研究

生成 AI には、学習効率の向上や個別化された学習支援など、多くの教育的利点が報告されている。まず、ChatGPT を活用した統計教育に関する（池田、2025 pp.105-107）の研究では、t 検定（平均値の差を調べる統計分析方法）を学ぶ学生を対象に、ChatGPT を使った 100 分間の学習を実施した。その結果、学習前後の理解度テストにおいて**すべての項目で強い効果が確認され**、効果量（学習の伸びを表す指標）は 1.19～2.45 と、教育研究としては非常に大きな値が示された。さらに、ChatGPT 学習は従来授業の 6 倍、独学の 12 倍の効率で学習が進むことが明らかにされており、生成 AI が短時間で深い理解を促す可能性を示している（池田、2025 p.110）。

英語学習アプリを用いた研究 [山本 田中, 2025]でも、生成 AI による文章添削や学習課題の自動生成が学生から高い評価を得た。特に、文章添削機能は「改善点が分かる」「自分のペースで学べる」といった理由で支持され、AI の個別最適化されたフィードバックが学習を後押しすることが示された。一方で、添削基準の不透明さや「どのように改善すればよいか」の説明不足など、AI 特有の課題も指摘されている。

総じて、利点に関する研究は、生成 AI が学習効率を向上させ、個別化された学びを可能にするという共通の知見を示している。ただし、学生の理解を深めるためには、AI の回答をそのまま受け取るのではなく、学習者が主体的に活用できる環境づくりが必要である。

3-2. 生成 AI のリスクに関する研究

利便性が高い一方、生成 AI の利用には学習の質を損なうリスクも指摘されている。仙台大学による全国調査（約 8,769 名） [齋藤, 橋本, 山口, 内野, 2025]は、学生の 30.3%が生成 AI を利用したと報告する一方、**27.8%が AI 生成文のコピー＆ペースト提出を経験**していると述べている。これは、学生が AI 出力の意味を十分理解せず、安易に利用する傾向を

示している。また、64%の学生が「AIが出した内容が正しいかを確認する方法を知らない」と回答しており、情報の信頼性を評価する力の不足も明らかとなった。

さらに、全国の教員調査では、「AIによる不正レポートの増加」と「判断基準の不明確さ」を課題として挙げる教員が多く、大学側が不正を防ぐ制度的整備を十分に行えていない現実が示されている。危険性に関する研究は、生成AIを適切に利用するためには、学生のリテラシー（情報を正しく理解し判断する力）や、大学の評価方法、ガイドライン整備が重要であるという点で共通している。AIを使う能力だけでなく、AIを「疑って確認する力」が必要であることを強調している。

3-3. 利用方法の違いが学習成果を左右することを示す研究

生成AIの効果は「使ったかどうか」ではなく「どのように使ったか」によって大きく変わるという研究が増えている。池田（2025）が行った統計教育の研究では、生成AIを使った学生が大きな学習成果を上げた一方で、自由記述では「質問の仕方が分からなかった」「AIの説明が急に難しくなることがあった」といった声もあり、プロンプト（AIに与える指示）の質が学習成果を左右することが示唆された。（池田、2025 p.112）

仙台大学の調査では、AIへの過度な依存が先延ばし行動（プロcrastーション）や学習の浅さにつながることが指摘されている。これは、学生がAIを「考える代わりに使う」のか「理解を深めるために使う」のかで結果が変わることを示す重要な知見である。

これらの研究は、生成AIの利用には、批判的に読む姿勢、質問のスキル、自分の考察を追加する習慣が不可欠であることを明らかにしている。（斎藤ほか、2025 pp.30-31）

3-4. 課題設計（プロンプト設計）に関する研究

生成AIの教育効果を最大化する上で最も重要なのが、**課題の出し方（課題設計）**である。鎌田（2025）は、SDGsレポートを生成AIに作成させる実験を行い、具体的で構造化された指示ほどAI出力の質が高くなることを明らかにした。たとえば「例を挙げて説明する」「特定の目標に絞る」といった指示があると、レポートの論理性・一貫性が大きく向上した。一方、「広いテーマを与える」「簡単な指示だけを出す」といった場合、文章にばらつきが生じ、論点が散漫になる傾向が見られた。

これは、大学の典型的なレポート課題が「広すぎるテーマ」「構造の指定が弱い」場合が

多いことを踏まえると、非常に重要な示唆である。つまり、生成 AI 時代の大学教育では、曖昧な課題は学習の質を下げるリスクがある。

さらに、RIHE（高等教育研究）の総説 [広島大学高等教育研究開発センター, 2025]では、AI の普及により、大学はこれまでの「知識の量」ではなく「思考過程」や「学習のプロセス」を重視する評価方法に移行する必要があると論じられている。これらの知見は、「課題設計」と「評価基準」が AI 時代の大学教育の中心的テーマであることを示している。

先行研究の整理から、以下の点が明らかとなった。

- ・生成 AI は学習効率と理解を大きく向上させる可能性がある。
- ・しかし、誤情報、不正行為、依存などのリスクが同時に存在する。
- ・学習効果は“利用の仕方”と“課題設計”に大きく左右される。
- ・大学の制度やガイドラインの整備は不十分であり、透明性・評価方法の改革が必要である。

これらの知見を踏まえ、次章では、日本と海外の大学の制度文化の違いや、先行研究で抽出した利点・リスクがどのように教育現場に影響しているかを組み合わせて考察する。

第4章 分析・考察

本章では、第2章で整理した日英の大学ガイドラインの比較と、第3章で示した先行研究の知見を統合し、大学生の生成 AI 利用が学習成果にどのような影響を与えるか、また大学制度がどのように AI 利用に関与しているかを多角的に検討する。

4-1. 日本と海外大学の制度的違いが生む利用行動の差

東京経済大学とオックスフォード大学のガイドラインを比較すると、まず注目すべきは「透明性」の扱いである。オックスフォード大学では、AI 利用は許可制であり、課題提出時に利用箇所の申告が義務づけられている。これにより、学生は AI を使う際に「どこまで自分が考え、どこから AI を使ったのか」を明確に意識せざるを得ない。一方、日本の多くの大学では、AI 利用の申告義務は制度化されておらず、教員の判断に委ねられている。そのため、学生の側に「どこまで AI を使ってよいか」という判断基準が曖昧になり、結果として利用行動のばらつきが生じている。この差異は、制度文化の違いを反映している。欧米の大学は学術的誠実さを重視し、透明性・根拠・批判的思考が教育理念の中心に置かれている。そのため、AI 利用も「透明性を伴う正当な行為」と「不正行為」を厳密に区別しようとする。一方、日本の大学は「便利なツールとして使ってよいが、使い方には注意」という実務的な方針が中心であり、制度的に利用を管理するよりも、学生の自主性に委ねる傾向が強い。その結果、学生のリテラシー（情報の読み取り方や判断力）の差が、そのまま利用の質の差として表れやすい。

4-2. なぜ AI 利用は「学習成果の二極化」を引き起こすのか

先行研究を総合すると、生成 AI は正しく使えば強力な学習支援ツールである一方、誤った使い方をすると学習の浅さや依存につながる「二極化」を生むことが分かる。池田(2025)の統計教育研究では、ChatGPT を活用した学習が非常に高い効果量を示し、従来授業の6倍以上効率的であるとされた。しかし、仙台大学の全国調査では、学生の約3割が AI 出力のコピペ提出を行い、多くがファクトチェックを行っていないことが明らかになった。(斎藤ほか、2025 p.30) つまり、AI の有効性とリスクは表裏一体であり、学習者が AI を「考えるために使う」のか、「考えずに済ませるために使う」のかで結果が大きく異なる。

学生の自律性や学習目的の違いに応じて AI の利用態度が変化する点も重要である。英語学習アプリの研究では、学生が AI から受け取るフィードバックを積極的に活用することで

学習理解が深まった一方、「どのように改善したらよいか分からない」という声もあった。(田中 & 山本, 2025)これは、AI を活用する能力 (AI リテラシー) が学生の学習成果を左右することを示している。

まとめると、AI は「能力を伸ばすツール」ではなく「能力を引き出すツール」であり、利用者の姿勢によって成果が変動する。この構造こそが、生成 AI 時代の教育の本質的課題である。

4-3. 課題設計が AI 利用の質を決定する

AI 時代の大学教育で特に重要なのは、レポートの出し方、つまり 課題設計 (タスクデザイン) である。鎌田 (2025) が行った実験では、「具体例を必ず入れる」「テーマを一つに絞る」「構造を明確に示す」といった詳しい指示を与えた場合、生成される文章の質が大幅に向上した一方、曖昧な指示では文章の論理構造が弱くなり、焦点の定まらない内容となった。これは、大学のレポート課題でありがちな「広すぎるテーマ」「構成指示の不足」が、生成 AI の利用において特に問題となることを示している。(鎌田、2025 p.38)

AI は与えられた指示に忠実であるため、課題の方向性が曖昧であれば、生成される内容も曖昧になる。逆に、課題が明確であればあるほど、AI の得意分野 (構造化、例示、文章整形) が活かされ、学生はより深い理解につながるアウトプットを生成しやすくなる。

つまり、AI 時代の教育では「学生能力」だけでなく、「課題の質」そのものが学習成果を決定する要因となる。また、[広島大学高等教育研究開発センター, 2025]が指摘するように、AI の登場によって大学は「知識を覚えること」よりも「どのように考えたか」「どう学習したか」というプロセス評価へと移行する必要がある。課題設計と評価方法の見直しは、AI 利用の健全化に直結する。

4-4. 日本の大学が抱える構造的課題

日本の大学が AI 利用において直面している課題は、主に以下の 3 点である。

(1) 透明性の不足

多くの大学で AI 利用の申告義務がなく、学生が AI をどの程度使ったかが見えない。その結果、不正行為の判断が曖昧になり、教員が適切に評価することが難しくなる。

(2) 教員の AI リテラシー不足

全国調査でも、教員の約 40%が「AI の扱い方を十分に理解していない」と回答しており、大学レベルでも研修や体制整備が追いついていない。(斎藤ほか、2025 p.30)

(3) 評価方法の限界

従来のレポート課題では、生成 AI を使ったかどうかを見抜くことが難しく、口頭試問やプロセス提出などの評価方法の改革が必要である。

これらの課題は、単に「AI を使うかどうか」という次元ではなく、「大学が何を学習成果として重視するか」という教育理念の問題でもある。

4-5. 分析のまとめ

本章の分析を総合すると、次のような結論が導かれる。

- ・制度の違い（日本 vs 海外）は、AI 利用の質に直接影響する。
- ・生成 AI は学習成果を大きく向上させる一方、誤用すれば不正や学習の浅さにつながる。
- ・最重要なのは「課題設計」と「利用者の姿勢」であり、AI 活用の成否を決める鍵となる。
- ・日本の大学は透明性・評価方法・教員研修など制度的課題を抱えており改善が必要である。

これらの考察を踏まえ、次章では、AI 時代の大学教育がどのような課題設計・評価・ガイドラインを整備すべきかについて具体的に提言する。

第5章 結論・提言

本研究では、大学生による生成 AI の利用実態、学習への影響、そして日本と海外の大学におけるガイドラインの相違を整理し、AI 時代の大学教育がどのような制度や課題設計を整備すべきかを検討してきた。全章をふまえると、生成 AI は「学習を大きく助ける可能性」と「誤用による深刻なリスク」が共存する技術であり、その実際の影響は 利用の仕方 と 課題の出し方（課題設計） の二点に大きく左右されるという結論に至る。

まず、生成 AI には明確な教育的利点がある。統計教育の実験では、ChatGPT を利用することで従来授業の 6 倍以上効率的に理解が深まる結果が示され、英語学習アプリに関する研究でも、AI のフィードバックや課題生成機能が学習者にとって有用であることが確認された。これらの研究は、AI が個別最適化された学習支援を可能にし、短時間で深い理解を促す能力を持つことを示している。

一方、全国調査では、約 3 割の学生が AI 出力をそのまま提出した経験があり、6 割以上が情報の正確性を確認する方法を知らないと回答している。これらのデータは、生成 AI が学習の質を下げたり、不正行為につながったりする危険が現実存在することを示している。つまり、生成 AI の利点とリスクは表裏一体であり、「学生がどのような姿勢で AI を使うか」が学習成果の分岐点となる。

さらに、本研究で比較した日本と海外大学のガイドラインには明確な差異が見られた。東京経済大学に代表される日本の大学は、AI を補助的に認めつつも、利用の申告義務や評価基準の明確化が十分ではなく、運用が教員ごとに異なる。一方、オックスフォード大学では AI 利用は許可制であり、使用部分の申告が必須とされ、不正行為に対する基準も厳格である。この違いは、教育文化や学術的な誠実さに関する価値観の違いを反映しており、国内大学が今後見直すべき点を示している。

以上の考察をふまえ、本研究は次の三点を提言としてまとめる。

第一に、AI 利用の透明性を高める制度整備が必要である。
学生が AI をどの程度使ったかを提出時に明示する「AI 利用申告制度」を導入することで、不正の未然防止と公正な評価が可能になる。また、AI を用いた部分と学生自身の思考による部分を区別させることで、学習過程の可視化と批判的思考の育成にもつながる。

第二に、大学は課題設計を抜本的に見直す必要がある。

曖昧で広すぎるレポート課題は、生成 AI の誤用を招きやすい。今後は「具体例の提示」「焦点となる論点の明示」「構造化した問い」など、AI 時代に適した課題設計が重要である。また、AI を使うことを前提にした課題（AI の出力を比較・批判する課題など）も有効である。

第三に、評価方法を“結果中心”から“プロセス中心”へと転換する必要がある。口頭試問、小レポートの段階提出、プロンプト（AI への指示）やメモの提出など、学習者の思考過程を評価する方式が不可欠である。AI が生成した文章だけでは学生の理解度を測れないため、学習の過程を評価する仕組みが求められる。

総じて、生成 AI は大学教育に新たな可能性と課題をもたらしているが、適切な制度と課題設計を整えることで、学習の深まりと主体性を大きく支えるツールとなり得る。本研究が示した知見は、大学教育の質の向上と AI 時代の学習者支援のあり方を考える上で重要な一歩となるだろう。

参考文献

広島大学高等教育研究開発センター. (2025). 研究・教育における生成 AI の利活用の方法とその考え方. 野内 玲・井野瀬 久美恵 編 広島大学高等教育研究開発センター 高等教育研究叢書 177. CRID BN04906162

鎌田 光宣. (2025). 生成 AI におけるプロンプトエンジニアリングの効果 ―レポート生成と自動採点を用いた分析―. 千葉商大紀要 第 62 巻 第 3 号 pp. 25-40. CRID 1050867034386839552

山本修久, 田中修久. (2025). 大学生英語学習者による AI 英語学習アプリの有用性認知 ―課題生成機能・自律学習機能を中心として―. Language Education & Technology 62 (2025) 153 – 175. CRID 1390305721536913024

池田 修. (2025). ChatGPT を活用した主体的学習法の開発 t 検定の学習における革新的アプローチ. CRID 1050022457825369856

齋藤長行, 橋本智明, 山口恭正, 内野秀哲. (2025). 解説：学生と教員の生成 AI の教育利用状況と意識に関する全国調査. 『メディア情報科学研究』第 3 巻・第 1 号 pp.29-52. J-GLOBAL ID 202502260726115468

University of Oxford. 閲覧日 9 月 22 日 Guidance on safe and responsible use of Gen AI tools: <https://www.ox.ac.uk/students/life/it/guidance-safe-and-responsible-use-gen-ai-tools>

東京経済大学 情報システム課. 閲覧日 2025 年 9 月 22 日 生成 AI の利用について:<https://www.tku.ac.jp/iss/guide/classroom/ai/>

文部科学省 初等中等教育局. 閲覧日 2025 年 9 月 22 日 初等中等教育段階における 生成 AI の利活用に関するガイドライン :https://www.mext.go.jp/content/20241226-mxt_shuukyo02-000030823_001.pdf